

## 生涯スポーツ参加のための発展的課題の研究 ～大学スポーツに着目して～

亀山 有希

### A study on challenges to encourage the life-long participation in sports -through the experiences in college recreational sports-

(Yuki Kameyama)

#### 1. はじめに

人は「いつでも・どこでも・だれでもが等しくスポーツをする権利」を有しており、この権利はみんなのスポーツ憲章<sup>1)</sup>にて保障されている。日本では文部科学省が1995年から「総合型地域スポーツクラブ」への取り組みを重要視し、設置事業に取り組んできた。総合型地域スポーツクラブとは、「①子どもから高齢者まで(多世代)、②様々なスポーツを愛好する人々が(多種目)、③初心者からトップレベルまでそれぞれの思考・レベルに合わせて参加(多志向)」<sup>2)</sup>可能な地域住民による自主的・主体的運営のスポーツクラブであり、これらを通じて生涯スポーツへの積極的な参加を呼び掛けるものである。

一方で我が国のスポーツ集団に着目してみると、その特徴は「学校」という場で展開されている点にある<sup>3)</sup>。運動経験やスポーツ経験の中心は「体育の授業」や「運動部活動」に依るところが多いのが現状である。この日本の運動・スポーツ環境を肯定的に捉えるならば、「学校」に属している期間に生涯にわたって身体活動(スポーツ)や運動文化に親しむ(スポーツ観、健康観、運動能力・体力づくり、健康の維持増進、スポーツを通じた人との交流・コミュニケーション力など)という視点や発想のもとでの運動文化理解・体育実践が強く求められるのではないだろうか。しかし、体育授業の場面では「運動は好きだけど、体育は苦手」「運動は上手じゃないけど、からだを動かすのは好き」「疲れるから嫌い」「下手でもいいですか?」「みんなに迷惑をかけるかも・・・」「汗をかくのは嫌」といった会話や場面が学生間、学生と授業者間でしばしば見受けられる。これは「体育」に対する不得意意識・苦手意識の表れと捉える事ができるが、この発言の裏には技術面での課題・個人と集団との関わり・身体観等、たくさんの課題が内在しているといえよう。そして、この課題解決なくして生涯スポーツ観は育成できない。言い換えれば、体育授業において「運動文化理解をどう位置づけるのか」「身体活動における自己有能感をどう育むか」「どのような運動経験を重ねていくのか」等が明日の身体文化・運動文化を生成し、生涯にわたって運動やスポーツに親しむ素養を身につけることにつながるのではないだろうか。

そこで本研究では、①日本人のスポーツ参加傾向について「成人」と「青少年」に焦点を絞り、現代を生きる日本人のスポーツ志向と活動実態について整理する。また、その結果を参考に②「大学生のスポーツ経験・スポーツ観」についてプレ調査を実施する。一般体育受講者の意識や実態等から大学体育実技授業の課題を明らかにすることを本研究の目的と位置付ける。

## 2. 日本におけるスポーツ参加の実態

### (1) 日本における成人のスポーツ人口の動向

本節では、日本人における成人のスポーツ人口の動向について、スポーツ白書の調査結果<sup>4)</sup>を「運動レベル別のスポーツ人口」「成人におけるスポーツ種目別実施率」「定期的運動・スポーツ実施者の種目別実施状況」の観点から検討を加えていく。

#### 1) 成人における運動強度の設定

日本における成人のスポーツ人口の動向については、笹川スポーツ財団（以下、SSFと略す）が1992年以来、隔年で「スポーツ活動に関する全国調査」<sup>4)</sup>を実施し、スポーツの実施状況について報告している。

運動のレベルを「実施頻度」「運動時間」「運動強度」の3つの基準から階層的に積み上げ、過去1年間にまったく運動・スポーツを行わない水準を「レベル0」、年1回以上週2回未満の実施水準を「レベル1」、年1回以上週2回以上の実施水準を「レベル2」、年1回以上週2回以上の実施水準でそのうち1回あたりの運動に「30分以上」の時間を費やすものを「レベル3」、さらにその「レベル3」の中で主観的な運動強度が「ややきつい」以上を「レベル4」と段階をわけている（表1）。

表1 頻度、時間、強度によるスポーツ実施レベルの設定

レベル0	過去1年間にまったく運動・スポーツを実施しなかった
レベル1	年1回以上、週2回未満(1-103回/年)
レベル2	週2回以上(104回/年以上)
レベル3	週2回以上、1回30分以上
レベル4	週2回以上、1回30分以上、運動強度「ややきつい」以上

#### 2) 成人におけるレベル別スポーツ人口の推移

レベル別のスポーツ人口の数値を折れ線グラフに示したのが、図1である。

1992年から2004年の13年間のスポーツ人口の推移に着目してみると、次の傾向が読み取れる。

- ① 「レベル0」グループは、調査開始時では男性が59.4%、女性が40.7%と非実施率が高かったのに対し、時間経過とともに減少傾向をたどっている。
- ② 「レベル1」グループは、実施率が横ばいで大きな変動がなく安定している。
- ③ 「レベル4」グループでは、時間経過とともに上昇傾向をたどっている。

これらを総合すると、1992年から2004年の13年間では、「レベル0」が減少し、「レベル4」の人口が増加傾向にあることが指摘できる。また、「レベル4」をSSFでは「アクティブ・スポーツ人口」と定義し、運動頻度・運動時間・強度を考慮した質の高い運動・スポーツ水準の活動と定義している。そして、SSFでは「『レベル4』と『レベル3』を合計した成人の3割強が、実施の頻度のみならず運動時間を考慮した質の高い運動・スポーツ水準にあり、この背景には生活習慣病・体形の維持、健康・体力づくりへの関心の高まりなどがある」と指摘している。

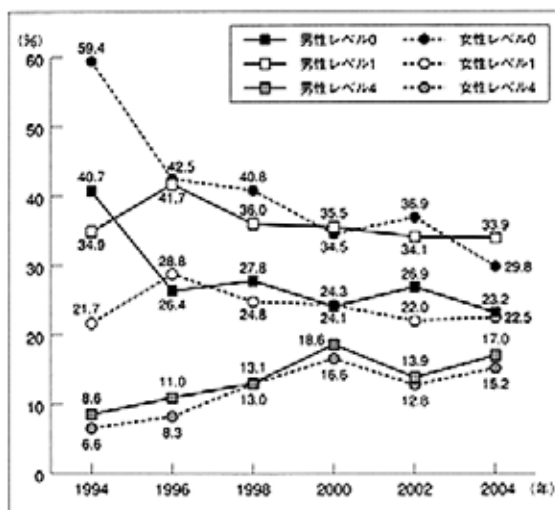


図1 レベル別スポーツ実施状況の推移

### 3) 成人におけるスポーツ種目別実施状況

「成人におけるスポーツ種目別実施状況」においても、SSF「スポーツ活動に関する全国調査」<sup>4)</sup>を参考としたい。表2は 種目別スポーツ実施率の動向(上位3種目)であるが、1996年以降、「ウォーキング・散歩」がランクインし、2002年には「ウォーキング」と「散歩」がそれぞれ独立し、実施率を伸ばす傾向をたどっている。定着の理由としては、「気軽さ」「道具を必要としない」「費用があまりかからない」「一人から始められる」等が推察できる。

表2 種目別スポーツ実施率の動向(上位3種目)<sup>5)</sup>

順位	1994年		1996年		1998年	
1	体操(ラジオ体操など)	24.6%	ボウリング	22.8%	ウォーキング・散歩	26.8%
2	ゴルフ(練習場)	20.6%	ウォーキング・散歩	22.3%	ボウリング	21.9%
3	ゴルフ(コース)	20.1%	体操(軽い体操・ラジオ体操など)	19.2%	体操(軽い体操・ラジオ体操など)	21.0%
順位	2000年		2002年		2004年	
1	ウォーキング・散歩	33.6%	散歩	31.1%	散歩	34.0%
2	体操(軽い体操・ラジオ体操など)	19.7%	ウォーキング	16.7%	ウォーキング	21.6%
3	ボウリング	19.7%	体操(軽い体操・ラジオ体操など)	16.2%	体操(軽い体操・ラジオ体操など)	18.6%

### 4) 成人における定期的運動・スポーツ実施者の種目別実施状況

SSFの調査<sup>4)</sup>によると定期的運動・スポーツ実施者の種目別実施状況については表3 週2回以上の定期的スポーツ実施者が行うスポーツ種目(上位3種目)のとおりである。この表では、スポーツの定期的な実施と種目との関係を明らかにするため、週2回以上の運動・スポーツ実施者(レベル2～レベル4の合計)を母集団にスポーツ参加者が行った運動・スポーツの上位

3種目とその推移が明らかになっている。この傾向は表2と類似傾向にあるが、種目や順位の変動がみられ、定期的なスポーツ実践者の傾向を確認することができる。SSFの報告では、『散歩(ぶらぶら歩き)』『ウォーキング』『体操(軽い体操・ラジオ体操など)』『水泳』『筋力トレーニング』『ジョギング・ランニング』に注目している。2004年のデータでは、週2回以上の運動・スポーツ実施者の半数は散歩を行っており、3分の1以上がウォーキングを行っている結果となり、体づくりを意識し、且つ個人で取り組める種目の順位が相対的に高くなっている。

表3 週2回以上の定期的スポーツ実施者が行うスポーツ種目(上位3種目)<sup>5)</sup>

順位	1994年		1996年		1998年	
1	体操(ラジオ体操など)	41.7%	ウォーキング・散歩	46.4%	ウォーキング・散歩	56.6%
2	ジョギング・ランニング	33.6%	体操(軽い体操・ラジオ体操など)	39.8%	体操(軽い体操・ラジオ体操など)	39.8%
3	水泳	21.4%	ボウリング	22.7%	ボウリング	22.7%
順位	2000年		2002年		2004年	
1	ウォーキング・散歩	60.7%	散歩(ぶらぶら歩き)	51.5%	散歩(ぶらぶら歩き)	50.7%
2	体操(軽い体操・ラジオ体操など)	33.9%	ウォーキング	31.5%	ウォーキング	36.8%
3	ボウリング	17.6%	体操(軽い体操・ラジオ体操など)	29.2%	体操(軽い体操・ラジオ体操など)	29.1%

## (2) 青少年のスポーツ参加傾向

次に日本人における青少年のスポーツ参加傾向について、成人と同様「性別・学校期別運動・スポーツ実施状況」「成人におけるスポーツ種目別実施率」「定期的運動・スポーツ実施者の種目別実施状況」について検討していきたい。

### 1) 青少年における運動強度の設定

日本における青少年<sup>6)</sup>の運動・スポーツ実施状況についても、SSFが2001年と2005年の2回にわたって「10代のスポーツライフに関する調査」<sup>7)</sup>を実施し、スポーツの実施状況について報告している。この調査では、成人を対象とした「スポーツ活動に関する全国調査」と同様、10～19歳の青少年のスポーツ実施状況を「実施頻度」「運動時間」「運動強度」の3つの観点から(表4)分析することを試みている。

スポーツ実施レベルは、過去1年間にまったく運動・スポーツを行わない水準を「レベル0」、年1回以上週1回未満の実施(1～51回/年)水準を「レベル1」、年1回以上週5回未満(52～259回/年)の実施水準を「レベル2」、週5回以上(260回/年)以上の実施水準を「レベル3」、さらに「レベル3」の中で1回120分以上で、運動強度が(主観に基づく)「ややきつい」以上を「レベル4」と段階をわけている。なお、ここでは学校の授業は対象外とされている。

特に着目したいのは、成人のスポーツ実施レベルの設定基準の違いである。これは、青少年と成人の体力の違いや社会環境の違いを考慮したものであると推察できよう。

表4 頻度、時間、強度による10代のスポーツ実施レベルの設定

レベル0	過去1年間にまったく運動・スポーツを実施しなかった
レベル1	年1回以上、週1回未満(1-51回/年)
レベル2	週1回以上週5回未満(52-259回/年)
レベル3	週5回以上(260回/年以上)
レベル4	週5回以上、1回120分以上、運動強度「ややきつい」以上

## 2) 10代のレベル別スポーツ実施状況

2005年のスポーツ実施レベルをみると、運動・スポーツをまったく行わなかった者（レベル0）は11.7%と全体の9人に1人とどまり、週1回以上の実施者（レベル2以上）が約8割、週5回以上（レベル3以上）が5割となっている。

2001年と2005年の調査結果を比較すると、次の傾向が指摘できよう。

- ①週1回未満の実施者であるレベル1が19.4%から9.6%に減少している。
- ②レベル4が20.3%（2001年）から28.5%（2005年）に増加している。

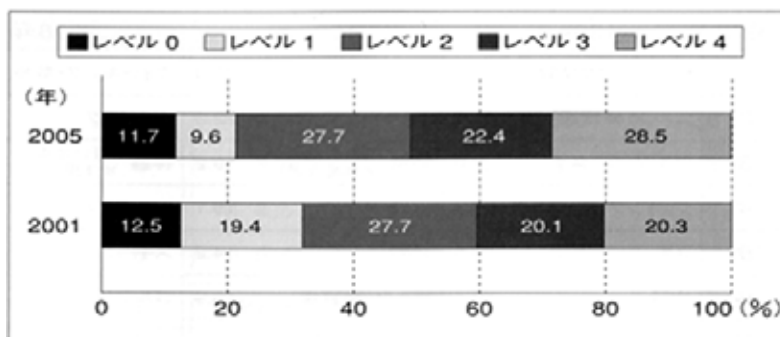


図2 10代の運動・スポーツレベル別実施状況

## 3) 青少年における性別・学校期別運動・スポーツ実施状況

次に、性別・学校期別運動・スポーツ実施状況であるが、ここでは特に「学校期別運動・スポーツ実施状況」に注目したい。学校期別にみても、レベル4の割合は中学校期、高校期が高く、学校運動部活動による運動参加が推察できる。また、大学期に入るとレベル4の割合は10%未満となり、レベル2程度のスポーツ実施者の割合が35.9%となる。これは、大学の部活離れやサークル文化が繁栄している結果と考えることができる。また、「15歳～19歳の勤労者では、レベル0の割合が35.7%と最も高く、週1回以上の実施者（レベル2以上）が32.9%で全体平均の半分以下となるなど、ほかの学校期と比べてスポーツ実施率が著しく低い。これらの傾向は、学校の施設や運動部活動・同好会などが、青少年の運動・スポーツ活動の基盤となっていることを裏づけるデータとみることもできる<sup>7)</sup>」。

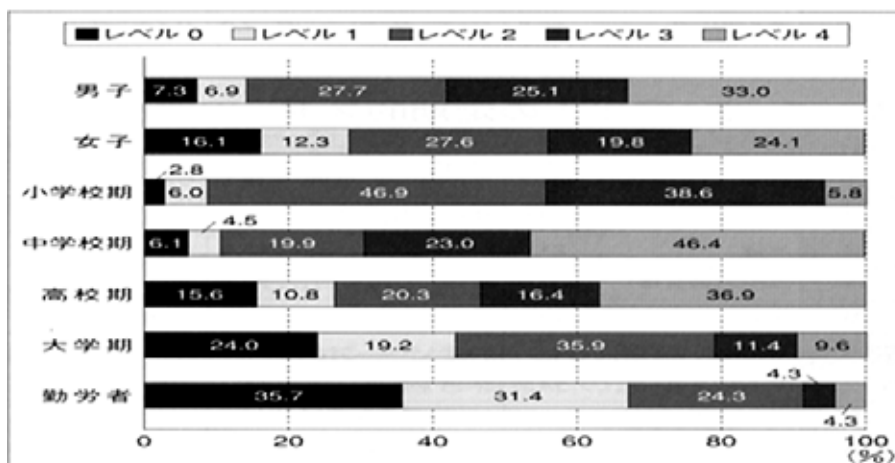


図3 青少年における性別・学校期別運動・スポーツ状況

#### 4) 青少年のスポーツ種目別実施状況

表5は青少年の運動・スポーツの種目別実施率（過去1年に1回以上実施した上位10種目）である。2005年に最も実施率が高かったのは「サッカー」であり、以下、「バスケットボール」「バドミントン」「ドッジボール」の順となっている。

また、表6は過去1年間に「よく行った（実施頻度が高い）」運動・スポーツについて、実施率の上位10種目を示した。ここでは、不定期に実施されるスポーツ種目が除外されており、日常的なスポーツ活動の実態を伺うことができる。2005年の上位は「サッカー」「バスケットボール」「野球」「バレーボール」「野球」「バドミントン」などであり、野球やバレーなど、年1回以上の実施率では上位10位以内に入っていない種目が含まれているのが特徴的である。

表5 10代の実施運動・スポーツ種目（年1回以上、上位10種目）

順位	2001年		2005年	
1	水泳	29.7	サッカー	29.0
2	バスケットボール	28.6	バスケットボール	28.6
3	筋力トレーニング	24.9	バドミントン	24.8
4	ジョギング・ランニング	24.8	ドッジボール	24.3
5	サッカー	24.7	なわとび	24.1
6	ボウリング	24.6	水泳	24.0
7	なわとび	24.6	ボウリング	23.5
8	バドミントン	23.8	キャッチボール	22.6
9	海水浴	21.2	筋力トレーニング	22.3
10	キャッチボール	21.1	ジョギング・ランニング	21.8

表6 10代の実施運動・スポーツ種目（「よく行った」種目、上位10種目）

順位	2001年		2005年	
1	水泳	29.7	サッカー	29.0
2	バスケットボール	28.6	バスケットボール	28.6
3	筋力トレーニング	24.9	バドミントン	24.8
4	ジョギング・ランニング	24.8	ドッジボール	24.3
5	サッカー	24.7	なわとび	24.1
6	ボウリング	24.6	水泳	24.0
7	なわとび		ボウリング	23.5
8	バドミントン	23.8	キャッチボール	22.6
9	海水浴	21.2	筋力トレーニング	22.3
10	キャッチボール	21.1	ジョギング・ランニング	21.8

### （3）成人と青少年のスポーツ参加傾向の比較

これまで日本の成人と青少年のスポーツ参加の傾向について、整理してきた。ここでは改めて、成人と青少年のスポーツ参加の傾向を比較検討し、青少年と成人ではスポーツ参加の傾向にどのような違いがみられるのかについて検討したい。

#### 1) 社会環境の違い（スポーツ環境の違い）

成人のスポーツ実施レベルの設定基準を比較すると、「レベル0」の運動を全く行わなかった者の基準は同一であるが、それ以降「レベル1」から「レベル4」については運動の実施回数の設定が大きく異なることに着目したい。青少年では「運動部活動」での定期的な活動が主流であり、日常生活に組み込まれている環境にあるといえよう。また、成人においては自由時間を活用しての運動参加が主流であり、ここに青少年と成人の社会環境の違いが指摘できる。

#### 2) スポーツ志向の違い

次に成人と青少年の「スポーツ志向」について、過去1年に1回以上実施した運動・スポーツの実施内容・実施率（表2 2004年と表6 2005年との比較）ならびによく行った種目の実施内容・実施率（表3 2004年と表7 2005年との比較）のデータから比較・検討したい。

まず、過去1年に1回以上実施した運動・スポーツの内容の比較であるが、成人では「散歩」「ウォーキング」「体操」「ボウリング」「筋力トレーニング」「釣り」が上位を占めるのに対し、青少年では「サッカー」「バスケットボール」「バドミントン」「ドッジボール」「なわとび」が上位5位にランクインしている。この内容を比較すると成人と青少年では次の「スポーツ志向」の傾向に分類することができよう。成人ではスポーツの性格よりも身体活動そのものやレクリエーションなどの身近な運動（日常生活に近い）で、個人でも取り組める活動への参加が高い傾向にあることがわかる。また、青少年では競技性が高いスポーツ（非日常的）、また集団で行うスポーツへの参加が高い傾向にあり、スポーツの志向には違いがあることがわかる。

同じようにこれを成人では週2回以上の定期的スポーツ実施者が行うスポーツ種目の実施内容・実施率と青少年の「よく行った」種目の実施内容・実施率とで比較してみたところ、さら

にこの傾向は明確になった。成人では「散歩」「ウォーキング」「体操」「筋力トレーニング」「ボウリング」が上位を占めるのに対し、青少年では「サッカー」「バスケットボール」「野球」「バレーボール」「バトミントン」が上位となった。

### 3. 体育・スポーツに関する基礎的調査－プレ調査の実施－

#### (1) 本調査の目的

日本人のスポーツ参加動向についてSSFが発表している統計結果も参考に、A大学の一般体育授業受講者の①スポーツ活動実態や②スポーツの志向等についてプレ調査を実施し、基礎的資料を得ることを目的とする。

#### (2) 調査方法

調査時期：2008年9月～2009年9月

2008年9月、2009年9月の同授業内で授業第1回目のオリエンテーション時に、体育・スポーツに関わる意識・実態についてのアンケート調査（同調査用紙）を実施した。

調査対象：A大学 後期「一般体育」を受講の1～4年生  
N=64（有効回答数64）

調査方法：質問紙によるアンケート調査

質問項目は以下の8項目を設定し、「①、③」については選択肢を、それ以外の質問については自由記述での回答とした。

質問項目：

- ①あなたはスポーツが好きですか？
- ②その理由を教えてください（好き・嫌いともに）。
- ③あなたは今までにスポーツ（体育の授業以外で）を経験したことがありますか？
- ④「ある」と回答した人は、最も長く行っていたスポーツの種類、時期、場所、活動内容を記述してください。
- ⑤一般体育（スポーツ2）の授業ではどんな活動をしたいですか？
- ⑥なぜ、その活動をしたのか、理由を記述してください。
- ⑦授業に対する希望
- ⑧自己PR

分析の方法：選択肢法による回答は単純集計し、また、自由記述での記録はKJ法を用いその傾向について分析を行った。

#### (3) 調査結果

本調査では上記8項目のうち、「質問①、②、③、⑤、⑦」について以下にまとめる。

##### 1) 属性

調査対象者の属性を調べたところ、1年生が38名（59.0%）、2年生が9名（14.0%）、3年生が16.0（25.0%）、4年生が1名（2.0%）の割合となった。



表7 調査対象者数

学 年	N 数 (%)
1 年生	38 (59.0)
2 年生	9 (14.0)
3 年生	16 (25.0)
4 年生	1 (2.0)
合 計	64 (100.0)

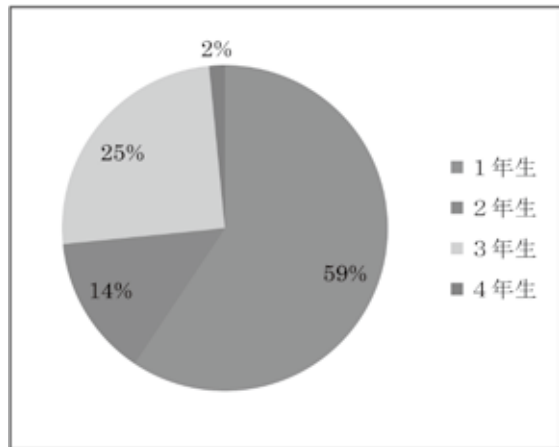


図4 受講者の学年別割合

## 2) スポーツの好き・嫌い

「するスポーツ」について「好きか嫌いか」を質問したところ、「好き」と回答した者は42名 (65.6%)、「嫌い」と回答した者は6名 (9.4%)、「どちらでもない」が14名 (21.9%)、「NA」が2名 (3.1%) となった。

表8 スポーツの好き嫌い

スポーツの好き・嫌い	N 数 (%)
好き	42 (65.6)
嫌い	6 (9.4)
どちらでもない	14 (21.9)
NA	2 (3.1)
合計	64 (100.0)

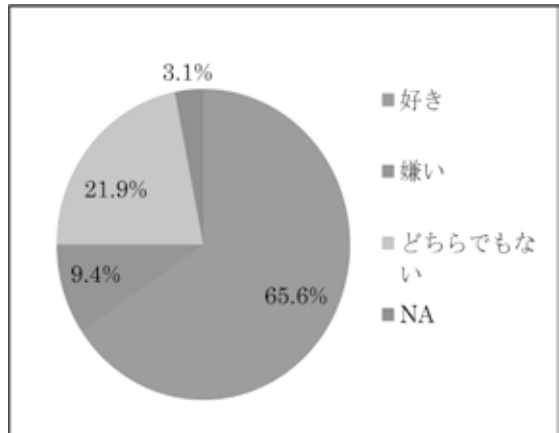


図5 スポーツの好き嫌い

## 3) スポーツの好き・嫌いの理由について (複数回答可)

スポーツを好きな理由、嫌いな理由を分類したところ、表9のとおりとなった。好き(肯定群)な理由として最も多かったのは「体を動かすことが好き (24)」であり、また、嫌い(否定群)な理由として最も多かったのは「運動そのものが苦手・運動神経が悪い (4)」が挙げられた。

表9 スポーツの好き・嫌いの理由

志向	順位	内容	N 数	%
好き (肯定群)	1	体を動かすことが好き (汗をかける)	24	24.2
	2	健康になれる (リフレッシュ効果・ストレス発散・体力の維持増進)	22	22.2
	3	運動そのものが楽しい。	14	14.1
	4	友達と活動するのが楽しい (コミュニケーション・協力)	6	6.1
	5	子どものころからの運動経験・運動部活動経験があるから	3	3.0
嫌い (否定群)	1	運動そのものが苦手・運動神経が悪い	4	4.0
	2	特定の競技が苦手	2	2.0
	3	疲れる	1	1.0
その他の意見		スポーツは苦手だが、好き 特定の運動が好き・もしくは嫌い 自由に活動できるから好き 勉強と違うから好き 前期の授業が楽しかった (エアロビクス) 運動・スポーツを通じて自己鍛錬できる みるスポーツも好きです 体力がないのでハードなスポーツは嫌い なかなかうまくできなくて、いつも苦労する。でも嫌いではなく、楽しい。 得意ではないけれど、頑張りたい。 スポーツでの勝敗経験が好き。 スポーツは苦手だが、表現領域 (ダンス) は好き。	7 5 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	23.2

#### 4) 「体育」以外のスポーツ経験

「『体育の授業』以外のスポーツ経験」について質問したところ、「ある」と回答した者は48名 (75.0%)、「ない」と回答した者は10名 (15.6%)、NAと回答した者6名 (9.4%) となり、学校教育機関以外で何らかのスポーツ経験をしている者が多い傾向にあ

表10 授業以外のスポーツ経験の有無

授業以外のスポーツ経験の有無	N 数 (%)
ある	48 (75.0)
ない	10 (15.6)
NA	6 (9.4)
合計	64 (100.0)

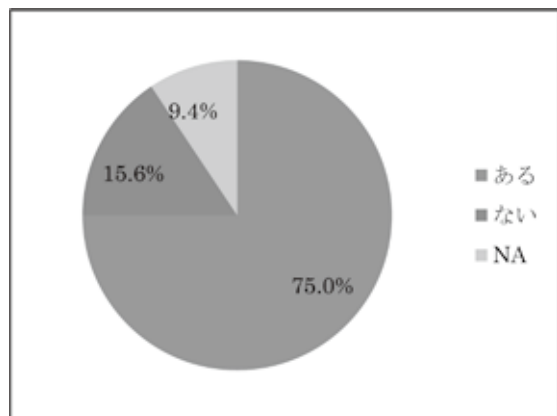


図6 授業以外のスポーツ経験の有無

ることが明らかとなった。

### 5) 一般体育（スポーツ2）の活動内容（複数回答可）

「一般体育（スポーツ2）で期待する授業活動・内容」については、具体的なスポーツ種目が数多くあげられた。運動種目の特性を考慮し、分類したところ、被験者の志向を表11のように分類することができた。

表11 一般体育（スポーツ2）で期待する授業活動・内容（複数回答可）

順位	運動の系統	内容	N数	%
1	ラケット系	バトミントン・テニス・卓球	68	42.2
2	球技系	バレーボール・バスケットボール	56	34.8
3	ダンス系	ヒップホップダンス・エアロビクス・フラダンス・ヨガ	33	20.5
4	ニュースポーツ レクリエーション	ニュースポーツ	1	1.9
		今まで（小・中・高）の体育の授業でやったことがないよう な新しいスポーツ	1	
			1	
5	その他	汗をかかないもの	1	0.6

### 6) 授業に対する希望

「授業を受講するにあたっての希望」について自由記述とし、その内容をKJ法を用いて分類を行った。その結果、授業に対しては「内容自体に関するもの」「授業目的に関するもの」「運動の得意・不得意にかかわって」というカテゴリーに分類することができ、特に「授業内容」に対する受講者の希望が強い傾向が表れた。

表12 授業に対する希望（自由記述）

No.	分類	内容	N数
1	授業内容について	楽しい授業を希望する	10
		たくさん運動したい（運動量の確保）	5
		受講者と関わる機会を増やしてほしい	4
		いろんな種目を経験したい	3
		ついていける内容だったらいい	2
		実技だけでなく、体のしくみについても教えてほしい	1
		自分でできて、続けられるようなことを教えてほしい	1
		運動能力を高めたい	1
		ゲームの時間を長くしてほしい。	1
		個人戦はいやです	1

2	授業の目的について	授業受講者とスポーツを通じて仲良くなりたい	2
		たくさん汗をかきたい(痩せたい)	1
		ダンスをしたい	1
		体を柔らかくしたい	1
3	運動の得意・不得意にかかわって	得意: 特定のスポーツ種目(例えばバスケット、バトミントンなど)を希望します。	2
		不得意: 特定のスポーツ種目(例えばバスケット、バトミントンなど)はしないでほしい。	2

#### (4) 調査結果のまとめ

本調査では学生の一般体育授業や運動・スポーツに関する意識・実態の傾向をまとめると、次のように特徴づけられる。

##### ①スポーツの好き・嫌い

選択制の授業という特色から、比較的スポーツを好きな学生が受講する傾向にある。また、スポーツが好きな理由については、「体を動かすことが好き」「健康になれる」「運動そのものが楽しい」が上位を占め、体を動かすことの楽しさ(本質的欲求)と健康志向傾向にあることが明らかとなった。スポーツが嫌いな理由としては、「運動そのものが苦手」「特定の競技が苦手」といったコメントが多く、運動すること自体に苦手意識を持っている傾向が明らかとなった。少数ではあるが注目したい意見としては、「スポーツは苦手だが、運動は好き」との回答が見受けられた。これはルールが明確で勝敗がつく(技術の差が明確となる)スポーツ活動については否定的だが、身体活動(競争でない、自由に)については肯定的に捉えている回答とみることができよう。

##### ②一般体育授業に期待する授業活動・内容

一般体育授業に期待する授業活動・内容について、具体的な身体活動・運動・スポーツに言及した回答を求めたところ、最も行ってみたい実技は「ラケット系(バトミントン・テニス・卓球)」、次いで「球技系(バレーボール・バスケットボール)」、「ダンス系(ヒップホップダンス・エアロビクスダンス・フラダンス)」の3系統に分類することができた。本項目ではスポーツ種目が具体的に挙げられる結果となり、一般体育授業＝スポーツ活動というイメージを受講者は持っていることが明らかとなった。

##### ③授業に対する希望

「授業を受講するにあたっての希望」を分類すると、「内容自体に関するもの」「授業目的に関するもの」「運動の得意・不得意にかかわって」というカテゴリーに分類することができ、特に「授業内容」に対する受講者の希望が強い傾向が表れた。その内容について着目してみると、授業者への要求事項が多いことがわかる。「楽しい授業」は受講者の大前提としても、「たくさん運動したい(運動量の確保)」「受講者と関わる機会を増やしてほしい(コミュニケーション)」「いろんな種目を経験したい(多種目経験)」「実技だけでなく、体のしくみについても教えてほしい(身体理解)」「自分でできて、続けられるようなことを教えてほしい(継続性)」「運動能力を高めたい(技術理解・技術習熟)」などの

項目が挙げられたことは、いずれも生涯スポーツにつながる因子であると捉えることができよう。また、運動の得意・不得意についてはどちらにおいても「特定のスポーツ種目」を限定する傾向がみられた。運動経験が与える自己有能感との関係が推測される。

#### 4. 今後の課題

本研究では、①日本人のスポーツ参加傾向について「成人」と「青少年」に着目し、現代を生きる日本人のスポーツ志向や活動実態について比較・検討を行った。また、これらを踏まえ②「大学生のスポーツ経験・スポーツ観」についてプレ調査を実施した。その結果、大学生のスポーツに対する志向は運動の本質（動きたい、うまくなりたい等）に沿ったものや健康志向に支えられていること等が明らかとなった。今回のプレ調査で得られた受講者の傾向は、生涯スポーツの目的と重なる部分が非常に大きいと考えられる。また、その一方で運動や技術に対する不安感や得意・不得意に対する意識が活動に大きく影響する因子である可能性も調査結果から確認することができた。授業に対する希望という質問の中では、「自分でできて、続けられるようなことを教えてほしい」という回答に代表されるように、生涯スポーツを意識させるようなコメントも見受けられ、一般体育授業の位置づけについてもスポーツ実践だけに陥らない授業内容について再考の余地があるといえよう。今回の調査結果を踏まえ①スポーツに対する得意・不得意観、②生涯スポーツ実施の目的、③体育授業以外でのスポーツに対する意識等についてさらに検討を重ね、大学生スポーツの全体像をつかむための研究基盤を形成していきたい。

今後の課題として次の項目があげられる。

- ①ユニバーシアード大会では「大学体育のあり方」が検討されている。その歴史的経過ならびに内容について整理する。
- ②これからの「生涯スポーツ」の在り方について、先行研究を用いて再考する。生涯学習時代のスポーツは目的的吗、方法論的かということも含め、あらためて問う必要がある。メルロ＝ポンティは「私とは、私の身体のことである」<sup>8)</sup>と述べているが、運動・スポーツ文化は「からだ」から始まるものであり、大学体育に参加する学生の「身体観」について調査する必要がある。
- ③本年度プレ調査をもとにした、アンケート調査紙の再構成と調査の実施。
- ④「総合型地域スポーツクラブ」に対する調査（愛知県ソシオ成岩総合型スポーツクラブ）。

#### 5. 謝辞

本研究の成果は大学体育授業の充実化ならびに生涯スポーツ振興のために活用していく所存です。本研究を進めるにあたり、本調査の目的に賛同し快く調査にご協力いただいた調査対象のみなさま、研究のご助言をいただきました関係諸氏に心から感謝の念を申し添えます。

#### 6. 引用・参考文献

- 1) スポーツ法学入門 1994.12.6 (株) 体育施設出版 p.116
- 2) 文部科学省ホームページ [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/club/main3\\_a7.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/main3_a7.htm)
- 3) 日本体育協会 公認スポーツ指導者養成テキスト, 財団法人日本体育協会, 公研印刷株式会社, 2008.4.1, pp.155-156
- 4) スポーツ白書～スポーツの新たな価値の発見～, SSF笹川スポーツ財団, 株式会社かいせい, 2007.3.27, pp.26-29

- 5) 4) スポーツ白書調べによるデータをもとに筆者が加筆した(データはそのまま引用)
- 6) スポーツ白書～スポーツの新たな価値の発見～, SSF笹川スポーツ財団, 株式会社かいせい, 2007.3.27, pp.29-31
- 7) スポーツ白書～スポーツの新たな価値の発見～, SSF笹川スポーツ財団, 株式会社かいせい, 2007.3.27, p.30 1.25-30
- 8) スポーツとは何か, 玉木正之, 講談社現代新書, p.5
- 9) 「学生のスポーツ経験・意識と『一般体育改革』」, スポーツは誰のために, 関春南・唐木國彦編, 大修館書店
- 10) 教養としてのスポーツ科学, 早稲田大学スポーツ科学部編, 大修館書店, 第6刷, 2007.9.11
- 11) 異質共同の学び 体育からの発信, 出原泰明, 創文企画, 2004.7.20
- 12) 世界学校体育サミット～優れた教科「体育」の創造をめざして～, ICSSPE編集, 日本体育学会監修, 株式会社杏林書院, 2002.11.15
- 13) 体育の教育力～学校と地域で子どもをたくましく育てる教育論～, 岸本肇, 株式会社大学教育出版, 2006.9.11
- 14) スポーツの社会学, 池田勝・守能信次, 株式会社杏林書院, 1998.11.5
- 15) 「生きがい」とは何か 自己実現へのみち, 小林司, NHKブックス, 2009.2.10